理不尽な世界を、君と生きる

H&K YAMATO

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本は追い詰められていた。

資源も人材も艦艇も不足している世界で、主人公が艦娘と戦ったり触れ合ったりする物語。

書ききれなかったタグ

五十鈴を強引にねじ込んでいくスタイル

２０１７年７月２３日

読者様からの指摘を受けプロローグを一部編集いたしました。申し訳ございません。

２０１７年１２月３０日

書き方と内容を少し修正しました。

２０１８年１月１日

第四話の内容を若干修正しました。

２０１８年５月７日

第４話の内容を一部変更しました。

目次

プロローグ　1
邂逅　4
初戦　11
建造　17

プロローグ

２０２０年４月７日

後に大切な日となるこの日、俺は絶対絶命な状況に置かれていた。

「敵の砲弾、来ます！」

ズバババーン！

近くの水面で敵の砲弾が複数炸裂する。

水柱がそそり立ち、艦橋に水しぶきがかかる。

「右舷に至近弾！」

見張員が悲鳴のような声でこちらに報告をする。

「こちらの砲弾はどうしたぁ！」

俺は見張員に向かって怒鳴りかえした。

「敵１番艦に命中弾多数！しかし、効果なし！」

「クソッタレがぁ！」

あまりの理不尽さに悪態が口から出てくる。

こちらの速射砲は効かない。

機関銃は射程外だが試してみても結果は見えている。

放ったミサイルは海の藻屑になった。

二隻いた僚艦も、もういない。

「艇長、指示を！」

俺の船、ミサイル艇かみたかでは太刀打ちできないことは明白だった。

敵は単縦陣で同航戦を挑んできている。

敵の砲塔はこちらを睨んでいるだろう。

ならば、できることはひとつしかない。

「これより、本艦は衝角戦を行う！」

艦橋に詰めている奴らが、案の定騒ぎ出す。

「無茶ですよ艇長！どうか考え直して下さい。」

「的になりに行くようなものです、命令を撤回して下さい！」

「撤退すればいいじゃないですか！」

反応は予測できていたが、最後の言葉だけは我慢ならなかった。

「貴様、後ろが見えんのかぁ！」
俺は、撤退を叫んだ航海長の胸ぐらを掴んだ。
「葛城航海長ぉ！後ろには何がある！」
「呉…です。」
彼の言葉によって喧騒が止んだ。
答えを言った彼の胸ぐらをはなし、
「我々は、もう退けんのだ！」
と怒鳴った。
日本はそこまで追い詰められてしまっていた。
「かくなる上は、敵艦を一隻でも沈めなければならない！」
太平洋上に突然現れた謎の艦隊によって、人類はわずか二年で制海権を失った。
「ここからは俺の独断だ、おりたい奴は降りろ！ただし、すぐ判断しろ！」
護衛艦群はなすすべもなく太平洋に沈んだ。
日本には、戦時急造されたミサイル艇しか戦力が残っていない。
そして呉に配備されていた貴重な戦力も、今日ここで消えるのだ。
「敵先頭艦に、突っ込むぞ！」
俺はホ級と呼ばれている、周りにいるやつより少し大きいやつを目標にした。
「取り舵一杯」
軍人も、この二年で大勢死んだ。
内地にずっといて、戦闘経験が全然ない俺もこんな最前線にいる。
「とぉぉりかぁぁじ、いっぱい」
操舵員がヤケクソ気味な声で命令を復唱する。
船が向きを変える。
「戻せ」
「もどーせー」
思えば短い人生だったな、せめて彼女ぐらいほしかったな、親父やお袋にもっと孝行すれば良かったな、とこれから死ぬかもしれないのに頭は意外と冷静だった。

「前進一杯！」
「ぜんしんいっぱい、よーそろー」
頭がそんなことを考えている間も、体は命令を下し続けていた。
タービンの唸る音が、ガタガタと振動する船体が、もう戻れないことを告げている。
ホ級の船影が大きくなってくる。
現代の船ではありえない直方体に近い形の艦橋や、船体のあちこちにある単装砲がはっきりと見える。
「総員、何かに掴まれぇ！」
ズガァァァン！
轟音とともにかみたかは敵に衝突した。

邂逅

俺の船は奴に衝突した。
かみたかの艦首は、奴の船体にしっかりとくい込んでいた。
「後進一杯！」
奴に追い打ちをかけるため、後退の指示を出す。
こうすれば、奴は大量の水を抱え込んで沈むはずだ。
「こううぅしん、いっぱぁぁい！」
復唱が返され、かみたかがゆっくりと後退を始める。
鉄と鉄が擦れるいやな音とともに、艦首が抜けていく。
「やったぞ！」
艦首が抜けきると、誰かが喝采をあげた。
奴の船体には大きな破口が穿たれていた。
「残りの奴らはどうした？」
「反転し、離脱していきます。」
見張員の声には、隠しきれていない喜びの色があった。
「こちらの損害確認を急げ！」
俺は皆に怒鳴って、浮ついた気持ちを引き締めさせる。
まだ戦闘は終わっていない。
「艦首大破！」
「速射砲、使用不能！」
「船体に亀裂があります、浸水が止まりません！」
矢継ぎ早に報告が入るが、最後のがまずい。
「船は後どれくらい持つ？」
「あまり長くないはずです、船の放棄を意見具申いたします！」
どうやら自分たちの戦果に酔う暇もないようだ。
「機関停止！総員退艦せよ！」
タービンの音が消え、乗組員が海に飛び込んでいく。
船内に人がいないか確認した後、俺も海に向かって飛び込んだ。
救命胴衣を着ているおかげで、体が水面に浮いた。
船の沈没に巻き込まれないように、泳いで距離をとる。

ピィイイイイイイ
「総員、ここに集まれ！」
沈みゆく船から十分距離を取った後、救命胴衣についているホイッスルを吹いて皆を呼び集める。
「これより点呼を開始する、番号！」
「１！」「２！」「３！」「４！」「５！」「６！」「７！」「８！」「９！」「１０！」「１１！」「１２！」「１３！」「１４！」「１５！」「１６！」「１７！」「１８！」「１９！」「２０！」
とりあえず、全員いることに安堵した。
「ひとまず、ここで救助を待つ！全員なるべく動かず体力を温存するように。」
とりあえず待機という命令を下すと、今まで張り詰めていた空気が緩んだ。
生還を泣いて喜ぶ奴、隣にいる元乗組員と雑談を始める奴、疲れていたのか居眠りを始める奴もいた。
俺は、沈みゆくかみたかとホ級を眺めていた。
すると、後ろから声がかけられた。
「高須艇長、先ほどはすみませんでした。」
「葛城か。」
振り向くと葛城航海長がいた。
「俺は別に怒ってはいない。」
「しかし…」
「俺だって、ここが太平洋ならお前と同じ決断をしていた。」
何か言おうとしていた葛城の言葉を遮って言った。
「撤退は、卑怯なことでも、臆病なことでもない。ただ、退くことができない時は存在する。忘れるなよ葛城。」
「はい！」
葛城とそんな話をしているうちに、ホ級もかみたかも海上から姿を消していた。
春になったとはいえ、海水はまだ冷たい。
救助はいつ来るのかと考えていると、俺は異常に気づいた。

海が…光っているのだ。
太陽の照り返し、というようなものではなくもっと柔らかな光だった。
まるで海の中で何かが光っているような
「総員、警戒せよ！海中に何かいるぞぉぉ！」
俺は大声をあげて皆に警戒を促した。
正体不明の光はどんどん強くなる。
もはや海の色が白くなっている。
あまりにも眩しくて目を開けていられない。
「クソッ！今度は何だ？」
目を閉じていてもわかる強烈な光は突然消えた。
目を開けてみると信じられない光景があった。
ちょうどホ級が沈んだあたりに、同じ形の船がいるのだ。
「まさか……復活した…のか？」
俺は呆然とした。
沈めても復活する船などありえない。
かみたかの犠牲が、無駄だと言われている気がした。
「艇長、どうすればいいですか！」
そばにいた葛城の声が俺を現実に引き戻す。
俺はこいつら全員を陸に連れ帰る義務がある。
「総員、傾注！」
皆がいっせいに俺を見る。
「見ての通り敵が復活した。」
皆が悔しそうな顔をする。
自分たちの船を犠牲にしても勝てなかったのだ、当然だろう。
「だが、敵の船も復活したばかりで動けないようだ。」
事実、こうして話している間も動く様子が全くない。
「これより俺たちは、あの船に乗り込む！」
何が起こるかわからないが、やるしかない。
このまま待っているだけでは、無抵抗で攻撃を受けることになるだろう。

ならば乗り込んで乗っ取るしかない。
「先ほど以上に、危険だ。強制はしない。」
そう言って、俺は泳ぎだした。
後ろで皆が泳ぎだした音がした。
そのことに安堵しながら、俺は奴に近づいていった。
やがて、ホ級の側にたどり着く。
ここまで近づいても、奴は動かなかった。
機関部が動いている音はするのだがなぜ動かないのだろうか？
「そういえば、どうやって登るか考えていなかった…」
近づいたはいいが、登り方がわからない。
どうやって登るか考えていると、上からロープが降ってきた。
驚いて上を見上げると、
「何だこいつらは？」
人形を少し大きくしたようなものが、上にたくさんいた。
二頭身の人型で、背丈は目算で８０センチぐらい。
どれもセーラー服らしきものを着ている。
俺はそいつらの丸い目に見つめられていた。
いざ敵地に赴こうという時に、なんとも敵意を抱きづらいものが出てきたものだ。
「艇長、登りますか？どうしますか？」
ついてきた葛城が、俺に聞いてきた。
はっきり言えば罠の可能性はある。
だがここからしか登れないならば
「登って乗船する。俺に続け！」
俺は乗船を選択した。
ロープをつかみ、甲板まで登る。
登りきったところで襲われるかもしれないと思っだが、奴らは俺を見つめるだけで何もしてこない。
「なんか気味が悪いな…」
思わずそう呟いていた。
「キミガワルイトハナンダ！シツレイナ！」

すると、1番近くにいた人型が喋った。
「喋ったぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
驚いた俺は思わず大声をあげてしまった。
「艇長、どうしました⊠」
後ろにいた葛城たちが慌てて登ってきた。
「そこにいる変なのが喋ったんだ。」
「ヘンナノトハナンダ！ヨウセイトヨベ！」
葛城たちも驚いていた。
俺たちにとっては人形が動いて喋るようなものだ。
「マアイイ、カンチョウガオヨビダ。ツイテコイ！」
自称妖精は、艦橋に向かって歩き出した。
「艇長…」
「あいつらについていってみよう。」
乗っ取るといってもどうすればいいかわからなかったので、とりあえずついていくことにした。
それに船の重要部分は機関部と艦橋なので、艦橋に行けば何かあるかもしれないという期待もあった。
「カンチョウ、ツレテキマシタ。」
そうして俺たちは彼（？）の先導で、艦橋に連れていかれた。
「ご苦労さま。」
そこには1人の少女がいた。
「さて、〝私〟の中にようこそ。」
彼女が俺たちに向かって話す。
白いリボンでまとめたボリュームのあるツインテール、澄んだ青い瞳、均整が取れた体に襟が茶色の白いセーラー服と赤いスカート、引き締まって弾力がありそうな足に白いニーソックス。
どう見てもこんな場所でするような服装ではないが、彼女の自然な立ち振る舞いが服装の違和感を感じさせなかった。
「とりあえず近くにいたから助けたけど、あなたたち何者？」
その身にまとう雰囲気は、なぜか以前俺が見た護衛艦の艦長に近いものだった。

ずっと戦場にいた奴特有の、こちらを冷静に分析しているような感じ。
「そちらこそ何者だ？なぜ俺たちを襲う？」
彼女の雰囲気に圧倒されながらも俺は質問を返した。
しかし、彼女から返ってきたのは予想もしない答えだった。
「襲う？何それ？私はそんなことしてないわよ。」
どういうことだろうか？
「とぼけるな！さっきまで戦っていただろうが！」
葛城が叫ぶ。
「冗談じゃないわよ！こっちだってさっきここにきたばかりなのに！何が起こったか聞きたいのはこっちよ！」
ここでわざわざ嘘をつく理由はない。
もし彼女が俺たちの敵なら、俺たちが乗り込んで来る前に殺すべきだしロープを投げるべきでもない。
もしかしたら復活したと思ったのは間違いで、実は別の個体なのだろうか？
「米兵ならともかく、なんで私が日本人を襲わなきゃいけないのよ！私は日本の軍艦よ！」
そんなことを考えていると、彼女の口からとんでもない言葉が飛び出してきた。
「日本の？君が？」
「私は、長良型軽巡の五十鈴よ。覚えておきなさい！」
嘘をいっているようには見えないのだが言っていることが突飛すぎた。
俺が質問を続けようとした時、艦橋に別の妖精が飛び込んできた。
「オハナシチュウノトコロシツレイイタシマス。ミハリヨウセイガ、フシンセンヲハッケンイタシマシタ！」
「艦種は？」
「オソラククチクカントオモワレマス！」
「数は？」
「ニセキデス！」

五十鈴が冷静に報告を聞いているのを聞きながら、俺は首から下げていた双眼鏡で周囲を確認する。
そして奴らを見つけた。
「クソッ！奴ら戻ってきやがった！」
思わず舌打ちをする。
「何？あの不審船のこと知っているの？」
五十鈴がこちらに目を向ける。
「あいつらはイ級駆逐艦だ！今の俺たちの敵だよ。」
あのステルス性の欠片もない艦影は奴らで間違いない。
「じゃあ、あいつらは日本の敵ってことでいいのよね？」
「そうだ。」
俺の答えを聞いた五十鈴は”嗤った”。
「じゃあ、殺ってもいいのね？」
「お、おう。」
思った以上に好戦的な様子に驚く。
「しかし、できるのか？」
先ほどの光景が頭に蘇る。
「馬鹿ね、私を誰だと思っているの？」
五十鈴の声にはなぜか自信が感じられた。
なんの根拠もないが、信じてみたいと思わせる声だった。
「総員第一種戦闘配備！」
どのみちあいつらは倒さなければならないのだ。
ならば、信じてみるのもいいかもしれない。
「五十鈴、出撃します！」

初戦

「五十鈴、出撃します！」
彼女の力強い声と共に、妖精たちがあわただしく動き始めた。
「第一戦速！戦闘速度まで早く上げなさい！」
機関部のうなる音が増し、船体が波を蹴立てて進み始める。
「俺たちはどうすればいいんだ？」
俺は思わず彼女に尋ねてしまっていた。
見たところ戦闘準備は妖精たちがやってしまっているようなので、やることがない。
「そうね、あなたはここに残って。残りは応急修理班の手伝いをお願い。妖精に案内させるわ。」
なぜか俺だけが艦橋に残れと言われた。
なんだかよくわからない状況になったなと考えつつ、俺は皆に指示を出す。
「聞いての通りだ、我々はあのイ級と交戦する。連戦でつらいかもしれないが、やるしかない。みんな頼む！」
「「解りました」」
俺の部下は妖精に誘導され、艦内に散っていった。
部下が出ていったのを確認し、俺は彼女に質問した。
「なぜ俺だけを残した？」
「敵のことを少しでも知っている人がほしかったからよ。」
私はあの敵と戦ったことないしね、とつぶやきながらも彼女は敵から目を離さない。
「では、なぜ俺なんだ？」
「あなたがあの人たちの指揮官みたいだったし、勇気がありそうだったから。」
「そうか。」
面と向かって勇気があると言われ、少し恥ずかしくなった。
「あら、照れてるの？」
彼女がこちらを見て笑っていた。

「そ、そんなわけないだろ！」
　その場をごまかすために、俺は敵を双眼鏡で見つめた。
「今の感じだと、Ｔ字戦か同航戦になりそうね。」
　彼女が言う。
「この艦の武装は？」
「竣工時にまで戻ってるみたいだから、１４ｃｍ単装砲７門に８ｃｍ単装高角砲２門、それから魚雷発射管が８門よ。」
「電探は？」
「ないわよ。」
　自称するだけあって旧海軍らしい武装だ。
「敵艦の射程は？」
「だいたいヒトハチマルマル（１８０００ｍ）で撃ってくる。」
　敵は主砲らしき単装砲が五基あり魚雷発射管も見える。
「大きさは駆逐艦ぐらいだし、たぶん砲戦で圧倒できるはずよ。砲撃戦で仕留める！」
「いや、あいつには砲撃や雷撃の類は効かないぞ。」
　効いていれば先ほどの戦闘で衝角戦などやる必要がなかった。
「そんなのやってみなきゃわからないじゃない！」
「いや、俺たちが試して駄目だったから言ってるんだよ！」
　その言葉に五十鈴は少し考え込んだ。
「でも私にはそれ以外の武装がないのよ、だから駄目元で試すしかないようね。」
　少し不安げに言う。
「なんだ、怖気づいたのか？」
「そんなわけないじゃない！本当よ！」
　彼女の態度が、冷徹な軍人から馬鹿にされた子供のようになった。
　素の彼女は案外挑発に乗りやすいのかもしれない。
　思わずにやにやしてしまった。
「なによ、馬鹿にして！」
「わかった、すまない。謝るから怒るな。」
　こんなところで関係が気まずくなってもまずいので、素直に謝っ

た。
「・・・まあいいわ。ヒトハチマルマルで砲撃戦開始よ。」
悔しそうな顔で彼女がこれからの方針を告げる。
「１４㎝砲ならヒトキュウマルマル（１９０００ｍ）でも行けるんじゃないか？」
「馬鹿ね、最大射程で命中弾出せるわけないでしょ。」
今の護衛艦なら出せるんだが、と俺は心の中で言った。
敵の船影が段々と大きくなってくる。
もう少しでヒトハチマルマルの距離に入るという時、五十鈴が命令を出した。
「面舵！」
「オモオオオカァァァジ、１５ド！」
妖精が命令を復唱する。
あの小さい体でなぜ大きな声が出るんだ、とどうでもいい疑問が頭に浮かぶ。
そんな事を考えていると、船が右に向きを変え始める。
しばらくすると、五十鈴がまた命令を出した。
「戻せ！」
「モドーセェェェ、カジチュウオウ！」
舵は戻ったが船はまだ右に動いている。
「取り舵に当て！」
「トリイィィカァァァジニアテェェェ、５ド！」
先ほどとは逆の力が働き、船が直進に戻る。
「戻せ！」
「モドーセェェェ、カジチュウオウ！」
船が方向転換を終えた。先ほどから４５度回頭している。
敵艦も回頭しこちらに並走する形となった。
敵とは同航戦で戦うようだ。
「第三戦速！」
「ダイサンセンソクゥゥゥ、ヨーソロー」
タービンの唸りが増し、船が急加速する。

体が引っ張られて倒れそうになるが、足を踏ん張って耐えた。
「テキカン、ハッポウシマシタ！」
敵の砲弾が飛んでくるが、すべて船の手前に落ちた。
「思ったよりも敵の散布界が広いわね。」
彼女が敵の練度を笑う。
「そんなんじゃ漁船だって沈められないわよ。」
じゃあこいつらに沈められた俺らは、いったい何なのだろうか。
「左砲戦用意！目標、敵先頭艦。」
「サホウセンヨォォォイ！」
六基の主砲が旋回し、敵を睨む。
「ソウテンヨシ」
「ショウジュンヨシ」
「シャゲキジュンビカンリョウ！イツデモドウゾ。」
彼女は大きく息を吸い、大声で命じる。
「撃ちかたはじめ！」
「ウテェェェ！」
ドガガーン！
轟音と共に主砲が火を噴いた。
「ダンチャァァァク、イマ！」
敵艦が水柱に包み込まれた。
「キョウサデス！」
「次弾装填、急ぎなさい！」
俺は素直に驚いた。
「初弾から夾叉を出したのか。すごいな。」
「この距離なら当然よ。」
五十鈴は自慢げに胸を張った。
「テキカンハッポウ！」
敵が砲弾を放つが当たらない。
全て水に落ちてしぶきを上げるだけだ。
最大射程ぎりぎりだからだろうか。
「馬鹿ね、距離をつめようともしないなんて。」

俺たちにも、もっと口径の大きい主砲があればよかったのにと思った。
「ソウテンヨシ」
「撃ち方はじめ！」
「ウテェェェ！」
またも主砲が火を噴き、砲弾が敵艦に向け殺到する。
しかし今度は、先ほどと明確に違う点があった。
「ダンチャァァァク、イマ！」
敵艦で火災が起こったのだ。
「メイチュウダンヲカクニン！」
「数は⁉」
「ニハツデス。」
信じられなかった。
体当たりまでしてようやっと沈めた敵艦が、簡単に燃えている。
「なんだ、砲撃でも大丈夫そうじゃない。ってどうしたの⁉」
五十鈴が俺の顔をみて驚く。
うれしかった。
奴らが被害をこうむっていることが。
だが悲しかった。
被害を与えているのは、俺たちでないことが。
「何でもない！」
俺は目元をぬぐって怒鳴った。
「それより砲撃を続けてくれ！」
「え、ええ。」
彼女は戸惑いながらも砲撃を続行させた。
そして第五射を放った時、それは起こった。
「ダンチャァァァク、イマ！」
主砲塔の根元がひと際強く光ったかと思うと、敵艦で大爆発が起こった。
「状況は⁉」
「テキセントウカンノダンヤクコガユウバクシタトオモワレマス！」

敵は残り一隻。
「テキカンカイトウ、リダツシテイキマス！」
「追撃か、撤退か、どちらにしようかしら。」
彼女が悩んでいたので俺は言った。
「ここは追わない方がいい。単艦で追撃すると、不測の事態が起こったときに対処できないだろう。」
彼女は俺の言葉にうなずいた。
「そうね。とりあえず入港できる場所はある？」
「呉基地まで回してくれないか？そこなら何とかなるだろう。」
「わかったわ。」
こうして俺たちと五十鈴の初戦闘は終わったのだった。

建造

イ級との戦いが終わった俺たちは、呉基地へと向かっていた。
「五十鈴、呉に連絡したいんだがこの艦に置いてある無線機の種類はなんだ？」
俺は彼女に聞いた。
「９０式無線電話改四よ。」
まったく名前を知らない無線機が出てきた。
使い方もそうだが、自衛隊に通じるのかどうかすらわからない。
「しょうがない、入港直前に探照灯で連絡するしかないか。」
「何よ、私が悪いみたいじゃない！」
五十鈴がこちらを睨んできた。
非常に気まずいので話題をそらそうと、別の話題をふってみることにする。
「なあ五十鈴、呉に着くまでまだ時間がある。その間にお前のことをもう少し知っておきたい。だから話してくれないか？」
「話すっていっても、何が聞きたいの？」
「まずはこの船のことからだ。」
俺は彼女の目を見て、嘘をついてないか確認しようと努める。
先ほど彼女はこの船が長良型だと言っていた。
俺の記憶が正しければ、旧海軍の軽巡洋艦の名前である。
「この船はいつ、どこで建造された？」
「１９２０年、浦賀で。」
またもやおかしなことを言う。
いくらこの船の外見が旧海軍のものに酷似していても、まさか本物なわけがない。
「今が何年だかわかっているのか？」
「何年なの？」
「西暦２０２０年だ」
「・・・そう。」

彼女は悲しそうな顔をして黙り込んでしまった。
何か失敗したのだろうか。
空気を変えるため新たな話題を考える。
「そういえば、君の名前をまだ聞いていなかったな。教えてくれないか？」
今度は地雷にならなそうな話題を振ってみた。
「だから五十鈴だって・・・」
「それは船の名前だろう。」
俺は彼女の言葉を遮るように言う。
俺は軍艦ではなく女性としての名前を聞きたかったのだ。
「あー、そこからなのね。」
彼女は頭に手をやってうなった。
「どう説明したものかしら・・・・」
しばらくうなってから、彼女はこういった。
「私はかつて軍艦だったの。」
意味が解らなかった。
「〝私〟は本当に、軍艦の〝五十鈴〟だったはずなのよ。」
彼女は言葉を重ねた。
「〝私〟は１９２１年に生まれて、１９４５年に潜水艦の雷撃で沈んだはずだった。でも気づいたらこの場所にいたの、人間の体っていうおまけつきで。」
それはつまり、
「〝私〟は意識がない鋼のはずだった。でも〝私〟の意識は、今確かに存在してるの。」
「馬鹿な！過去の軍艦が意識をもって、しかも人間の体を得るなんてことは・・・」
「ありえないって思うでしょ。」
今度は俺の言葉が遮られる。
「近くで見てたのよね。私はどうやってここに来たのか教えて。」
「それは・・・」
潜水艦でもない船が、突然海上に出てきたなんてことはそれこそ〝

ありえない〟。
「突然海が光ったと思ったらこの船が・・・つまり君がいた。」
「やっぱり普通じゃなかったのね。」
こんなことどう説明しろというのか。
だがあの不思議な光は、超常現象でしか説明できない。
俺は五十鈴の言うことを否定できないのだ。
気が付いたらあった人の体、出てきた場所は未来。
彼女の心中は、俺には想像がつかない。
「君が旧海軍のものだということはとりあえず分かった。だがそれよりも、もっと重要なことがある。」
これこそが本題。
「君が奴らを〟砲撃で〟沈めることができた、ということだ。」
下手をすれば世界を変えるかもしれない重大事。
「あいつらって本当に砲撃が効かない奴らだったの?」
「そうだ。あいつらのせいで海上自衛隊・・・つまり海軍は壊滅状態だ。」
そんな奴らの沈没に、2度も立ち会うことになるとは思っていなかったが。
「原因に心当たりはあるか?」
「そんなのないわよ!と言いたいけれど、違う場所から来たってことかしらね。」
おそらくそれが理由なのだろう。
「砲撃で奴らを沈めることができる君は、おそらくこの世界で唯一奴らに遠距離攻撃ができる戦力だ。」
彼女はこれからどんな扱いを受けるのか、俺にもわからない。
兵器開発の研究対象にされるかもしれないし、戦力として使いつぶされてしまうかもしれない。
だが、彼女が少しでもいい扱いを受けるように心の中で祈った。
「私のことは話したから、次はあなたのことを教えてよ。」
重くなった空気が嫌になったのか、五十鈴が話題を振ってきた。
「まだ名前も教えてもらってないわよ。」

そういえばそうだったなと思い出し、
「呉地方総監部・警備隊所属、高須裕人だ。元ミサイル艇かみたか艇長で、階級は3等海佐。」
「3等海佐ってどれくらいの階級なの？」
「そっちでいう少佐ぐらいかな。」
「その割には結構若く見えるけど・・・」
「この二年で軍人もたくさん死んだからな、繰り上げって奴だよ。今25歳だ。」
「すごい若いわね。普通だったら30歳でも優秀な方なのに。」
「自慢じゃないが、海軍学校での成績が優秀だったからな。卒業した後に3年間、幹部上級課程修了後に任官されたんだ。」
そうしてしばらく彼女と雑談をした。
それは自衛隊の話だけでなく、家族の話や小さいころの思い出にまで及んだ。
どれも彼女には新鮮だったようで嬉しそうに聞いていた。
時刻はちょうどヒトナナマルマル（17：00）を回ったころだろうか。
彼女と話しているうちに、江田島の明かりが見えてきた。
「ゼンポウニショゾクフメイセンヲカクニン！」
見張り妖精が船を発見し報告してきた。
「あの船に見覚えはある？」
「呉所属の内火艇だ。」
五十鈴に味方であることを伝える。
内火艇の様子をうかがっていると、発光信号を出し始めた。
「フメイセンカラハッコウシンゴウデス！」
「読み上げて！」
妖精が信号を読み上げる。
「キカンノショゾクヲノベヨ、デス。」
「あの船は味方でいいのかしら？」
五十鈴が俺の方を見て質問する。
「ああ、そうだ。あれは呉の所属船だよ。」

俺が答えると五十鈴は、
「返信するわ！探照灯照射準備！」
「リョウカイ！」
探照灯が旋回する。
「タンソボウテキセイヲカクニン。」
「ショウシャジュンビカンリョウデス！」
艦橋に準備完了の報告が届くと俺は五十鈴にある提案をした。
「五十鈴、返信文は俺に任せてくれないか？」
「いいわよ。」
俺は彼女の了解を得ると妖精たちに指示を出した。
「前方の友軍に返答！我、元かみたか艇長高須裕人。入港許可を求む！」
探照灯が意志を伝えんと瞬いた。
内火艇はしばらく沈黙した後、「我に続け」と返答してきた。
「五十鈴、誘導に従ってくれ。」
「わかったわ。両舷前進微速！」
速度を合わせて内火艇に追従し、港まで進む。
誘導に従い入港し、タグボートの助けを借りて接岸した。
港には武装した陸軍の軍人や戦車たちがいた。
「副長妖精！留守の間を任せるわ。」
「オマカセクダサイ！」
俺は彼女と元かみたか乗組員を連れて船を降りることにした。
この艦の説明は五十鈴がいなければできないと思ったからである。
また外で何かあっては困るということで、護衛として水兵妖精が２人（？）ついてくることになった。
俺たちが甲板から桟橋へ降りると、
「警備隊司令の星崎１等海佐だ。いったい何があった？」
陸自隊員の中から俺の上司が出てきた。
星崎１等海佐の話によると、かみたかの沈没はレーダーで確認されていたらしい。
司令部は敵の撤退を確認したところで、すぐに救助船を向かわせよ

うとした。
　しかし新たな艦が突然現れ、敵艦と交戦し1隻を沈めた。
　しかもその艦が呉に向かってきている、ということで司令部は今大騒ぎになっているという。
「それで、今度はその艦から連絡が入ったというから出てみればこれだ。どういうことか説明してほしいんだが？それとそこにいる女性は？」
「はあ・・・、その説明がかなり難しいのですが。」
　なんと説明したらよいのか、誰か教えてほしい。
　突然船が海から現れ、それに乗って勝ちました。
　そんな説明をしたら正気を疑われる。
「とりあえずその船は敵ではないので、攻撃しないでいただきたいのですが。」
「・・・了解した。港にはそう伝えておく。それと、すぐに地方総監部庁舎に出頭してほしい。」
「元乗組員全員ですか？」
「いや、ひとまずは君だけだ。他の奴は後日ということになる。」
「了解しました。」
「では、また後で会おう。」
　星崎1等海佐は不吉な言葉を残し、地方総監部方面へと去っていった。
　桟橋のすぐそばにある駐車場には海自の人員輸送車3号が2台止まっていた。
　片方には元かみたか乗組員たちが乗り込み、高機動車の護衛付きで近くにある乗組員待機所へと向かった。
　もう片方は俺と五十鈴、そして第４６普通科連隊だと名乗る陸自隊員たちと一緒に地方総監部へと向かった。
　庁舎についた俺たちは、待合室に通された。
「しばらく座ってお待ちください。」
　周りを連隊員に囲まれて待つこと2時間。
「お待たせしました。第1会議室にお越しください。」

俺たちは陸自連隊員の案内で会議室まで向かった。
会議室の前に着き、俺が扉をノックする。
「高須3等海佐と他3名、参りました。」
「入れ。」
「失礼します！」
扉を開け中に入る。
向かって右の席には星崎1等海佐や地方総監部長官、左には幕僚長や管理部長、そして正面には
「安宋総理大臣!?」
「やかましい、静かにせんか！」
予想外すぎて思わず叫んでしまい、星崎一等海佐にたしなめられた。
さすがの五十鈴も首相が出てきたということに驚きを隠せないようで、目を丸くしている。
「はっはっは、まぁ驚くのも無理はない。楽にしたまえ。」
首相はいたずらが成功した時のような笑みを浮かべていた。
しかしなぜ首相がこんなところにいるのだろうか？
その首相は五十鈴の護衛である妖精をじっと見つめていた。
想定外の事態に混乱していると、
「高須三佐、本日の出撃後から帰還までにあった出来事を報告せよ！」
「はっ！報告いたします。我々は・・・」
そうして俺は今まであったことを報告した。
総監部の幹部たちはキチガイでも見るような顔をして俺を見ていたが、安宋首相だけは違った。
彼はこちらを食い入るように見つめ、一言も聞き漏らすまいという姿勢だった。
「以上で報告を終わります。」
俺は報告を終えて黙った。
内心どんなことを言われるか不安だったが、本当のことである以上言うしかないと開き直った。
会議室は耳が痛くなるぐらい静かになっていた。

その静けさを打ち破ったのは首相の発言だった。
「ではそこにいる彼女が例の艦の艦長、いや〝魂〟であるということかね？」
「はぁ、そういうことになります。」
首相が五十鈴に目を向けると、彼女は慌てて敬礼をした。
「ああ、楽にしていいよ。」
「はい、ありがとうございます！」
彼女は敬礼していた手を降ろした。
「では五十鈴君とやら、悪いが君が本当に〝五十鈴〟であるのか確かめたい。少し質問させてもらうがいいかね？」
「はい。」
そうして首相の周りにいた官僚が、資料を見ながら船の五十鈴に関することを訪ねて行った。
五十鈴はその質問すべてに答えた。
「やはり本当だったようだ。」
〝やはり〟？
「総理、失礼ですが〝やはり〟というのはどういうことでしょうか？」
「〝彼〟を部屋に入れてくれ。」
首相は答える代わりに誰かを呼んだ。
部屋に入ってきたのは、
「妖精☒」
入ってきたのは作業服を着てヘルメットをかぶった妖精だった。
「彼は以前あった大規模戦闘の直後に本土に流れ着いた妖精の一人だ。」
「総理は以前から妖精がいることを知っていらっしゃったということですね。」
「そうだ。」
総理は大きく頷いた。
「だから、君たちが連れている妖精を見たときから味方であるということはわかっていた。だがある程度尋問しないと周りへの示しがつかないからな。そこのところは水に流してくれると嬉しい。」

「いえ、もったいないお言葉です。」
元より最初からすんなりと受け入れられるとは思っていなかった。
それだけにこの程度の尋問で済んだのなら十分だ。
「それで、五十鈴君がなぜ敵を沈めることができたかということなのだが。」
やはりこの話題が来た！
「我々はこの妖精の存在が大きく関与していると睨んでいる。」
ん？五十鈴ではなく妖精？
「つい先日、彼らに作ってもらった１２ｃｍ砲で極秘に実験を行った。その結果、撃沈には至らなかったもののイ級に損傷を与えることができた。」
自分の知らないところでそんな実験が行われていたのか！
「彼らは、自分たちにもっと資源を与えてもらえば五十鈴君のような軍艦を作ることができると言っている。ただし第二次世界大戦や太平洋戦争に参加した艦に限るらしい。」
それはいい。五十鈴のような戦力を大量に生産できれば、制海権の奪還を夢じゃないはずだ。
「それは素晴らしいことです。ですがなぜその話を私に？」
こんな話は俺にしなくても上層部だけで共有すればいいことだ。
自分に話す意図が分からない。
「近々、妖精たちを集めた施設を作る予定がある。君にはそこの長として着任してもらいたいのだ。」
「理由をうかがってもよろしいですか？」
なぜ自分がそんな重要な施設の長を任されるのか分からなかった。
国防を担うなら自分よりももっと階級が高く、能力的に優れている人物であるべきだからだ。
「初めて奴らを沈めた君たちに何かしらの恩賞が必要であることが一つ。次に、妖精が乗った軍艦に乗艦したことがあるのが現在君たちだということ。だから、その中で最も階級が高い君を長とすることにした。他に質問はあるかね？」
「五十鈴はどうなりますか？」

「君と一緒にその施設に所属してもらうことになる。他には？」
「ありません。」
「追って辞令を出す、それまで待機だ。下がっていい。」
「はっ！」
そうして俺と五十鈴は退室した。
俺はその日乗組員待機所に泊まり、五十鈴は女性職員官舎の空き部屋に泊まることとなった。
そして翌日マルナナマルマル（07：00）、俺と五十鈴は首相がいない第一会議室で、呉地方総監から辞令を受け取った。
一週間ぐらいは待たされると思っていたが、こんなに早く辞令が出るとは…
それには今日中に大黒神島鎮守府に五十鈴を連れて着任しろと書かれていた。
しかも俺は2階級昇進して1等海佐になった。
気前が良すぎて不安だ。
五十鈴に話すと
「あら、あたしのおかげかもね。」
となぜが自慢げな顔。
笑顔はきれいなのだが、解せぬ。
「しかし大黒神島か。あそこに軍事施設は何もないはずだがどういうことなんだろうか？しかも鎮守府だと？」
「行けって言われたんだから行くしかないでしょ。地方総監に聞いても行けばわかるの一点張りだったし。」
俺たちは五十鈴の船体を回航し、大黒神島に向かった。
「なんだこれ・・・」
「私が沈んでいる間に、大黒神島って軍港になったの？」
「そんなわけあるか！」
大黒神島を見た俺たちは困惑した。
ちょっとした丘ぐらいしかなかったはずの島に、巨大な港ができていたのだ。
島はすべて平地にされていて、三百メートル級の桟橋が数本突き出

している。
面積も明らかに広くなっており、巨大な倉庫や大型のクレーンそして官舎と思われる建物が五つ、そして屋根付きのドックと思われる施設が四つ。
さらに、防衛用の沿岸砲台と思わしきシルエットも確認できた。
場所を間違えたかと思い、五十鈴と何度も海図で確認したがここは大黒神島で間違いなかった。
困惑して周辺を周回していると、さっさと入港しろと言わんばかりに港からタグボートが出てきた。
タグボートに誘導（連行？）されて接岸すると、桟橋には作業服を着た妖精たちが待ち構えていた。
「シレイカンニーケイレイ！」
掛け声とともに一糸乱れぬ動きで２０人ほどの妖精が敬礼する。
彼らには悪いが、おもちゃの兵隊が敬礼しているように見えて少しおかしかった。
とりあえず答礼する。
「ヤスメ！」
号令とともに妖精がたち手を降ろす。
同時に代表と思われる妖精が前に出てきた。
昨日会ったあの妖精だった。
「ヨウコソイラッシャイマシタ、カンゲイイタシマス。ココニイルヨウセイノオサヲシテイマス、コウショウチョウトオヨビクダサイ。」
「では工廠長、この鎮守府の案内を頼む。他の妖精は持ち場に戻っていてくれ。」
俺が解散の指示を出すと妖精たちはそれぞれの持ち場に散っていき、工廠長だけが残った。
「デハゴアンナイシマス。」
最初は俺の執務室と、その隣にある俺の部屋からだった。
執務室には木で作られた重厚な１人用の執務机と、大人数で座れそうな会議机があった。
執務机の後ろには南向きの窓があり、日当たりは良さそうだった。

また執務机から見て左側の壁には黒板があり、作戦の説明に使うようであった。
部屋の隅にはまだ明け終わっていない段ボール箱があり、新設直後の雰囲気を出していた。
次に、俺の部屋は三つに仕切られていた。
玄関から入ってすぐ居間で、両脇に台所と寝室というシンプルな構成だった。
「意外といい部屋でよかったじゃない」
「そうだな。」
その次は官舎を案内された。
しかし、俺たち二人に妖精たち全員を入れてもはるかに余裕がある広さだ。
「なあ工廠長、聞きたいことがあるんだがいいか？」
「ハイ。」
「君たちが建造する船にも、五十鈴のように妖精やその・・・艦の魂を持った女性が乗っているのか？」
「ハイ、ソウナリマス。」
「では、五十鈴はどうして何もない場所から現れたかわかるか？」
「モウシワケアリマセンガソレニカンシテハワカラナイノデス。」
やはり五十鈴の例は妖精たちにとっても特殊なものだったらしい。
まあそこらへんはまた今度考えばいいか。
「それともう一つ、君たちはなぜ我々に協力してくれるのだ？」
ずっと気になっていた。
彼らが作る武器は魅力的だが、理由もなしに協力すると言ってくる輩を信じるのは少し抵抗がある。
「アナタハワレワレガカコノエイレイトイッテモシンジマスカ？」
まあ普通は信じないが、
「信じるよ。過去の亡霊ならすぐ隣にいるしな。」
「ちょっと、亡霊って何よ。失礼ね。私も英霊って言いなさいよ。」
五十鈴が腕をつねってきた、痛い。
仕返しに髪をぐしゃぐしゃにしてやった。

涙目で睨んできた。
ちょっとかわいい。
「ジダイハチガエド、ココハニホンデス。ワタシガウマレソダッタクニデス。ソレガコタエデスヨ。」
「そうか、ありがとう。」
小さい妖精の姿が少しかっこよく見えた。
「ツギハコウショウヲアンナイイタシマス。」
そうして向かった先にドックとつながっている巨大な建物があった。
中に入ると、ドックの他に装備開発用の機械と思われる設備、艦艇修理用足場の材料などが所狭しとおかれていた。
そしてドックの前には数字を入力するような機械があった。
「工廠長、この機会はなんの機械なんだ？」
「フネヲケンゾウスルトキニ、シザイノトウニュウリョウヲキメルキカイデス。」
「投入量？」
「ソウデス。トウニュウリョウニヨッテデキルカンセンガチガイマス。」
俺たちは工廠長から資源や建造システムについて説明を受けた。
まず資源には燃料、弾薬、鋼材、ボーキサイトの四種類があること。
これら四種類の資源は艦の出撃、修理、建造に使われるということ。
このドックでは駆逐艦、軽巡洋艦、重巡洋艦、航空母艦、戦艦を建造することができるということ。
それぞれの艦種で必要な資源量が違うが、投入した資源量に見合った艦が出てくるとは限らないということ。
（つまり戦艦の資源量を投入しても駆逐艦が建造される可能性があるということ）
そして建造されるのは、司令官もしくは五十鈴のような建造艦の招きに艦魂が応じた場合であるということ。
「なんかすごい数の制約がないか？」
「ワレワレトテジユウニカンヲツクレルワケデハナイノデス。ゴリカ

イショウクダサイ。」
　これは妖精でもどうにもならないらしい。
「タメシニケンゾウヲヤッテミマスカ？」
「そうだな、五十鈴1隻だけでは心もとないし、やろう。」
「新しい仲間が、艦隊に加わるのね。」
　俺は工廠長から聞いた、駆逐艦の資源量を1番ドックの機械に入力した。
　四種類の資源をそれぞれ３０ずつ投入すればいいようだ。
　五十鈴は2番ドックに入力していた。
　建造開始のボタンを押すと、ドックのなかに突如として光の玉が現れた。
「ねえあたしの時もあんな感じだったの？」
「まあそうだな。多分海中で光の玉が光ってたんだろうな。」
「ケンゾウジカンハ１８フント２２フンデス。」
「そんなに早いのか!?　お前らの技術っていったい何なんだよ・・・」
　どんな新しい艦が来るのか、今から楽しみだ。
　五十鈴も少しそわそわしているように見える。
　俺たちは工廠長も交えて3人で雑談をしながら、時が過ぎるのを待った。
「ア、ソウイエバダイホンエイカラシキュウサレタシゲンハソレゾレ３００シカアリマセンノデ。」
「そういうことはもっと早く言えよぉ！もう６０使っちゃったじゃないか！いやまあ必要経費だけどさぁ！」
　前途は多難であった。